

日本人ホストマザーのホームステイ観の多義性

ホームステイ受け入れに関する認識の PAC 分析

愛知県立大学国際文化研究科国際文化専攻博士後期課程

木戸志緒子

1. はじめに

日本における国際交流の主体は、1960 年代にエリート層から大衆へと移行し始め、1972 年は「国際文化交流元年」とされた(植田 2004)。1980 年代後半から地方公共団体は、「国際交流」と「国際協力」を柱とし、1995 年の「自治体の国際協力元年」を背景とし、民間レベルの草の根国際交流の活動が活発になっていった。さらに地方公共団体に対して、総務省は 2006 年に多文化共生推進プランの中で地域における多文化共生を推進する旨を通知し、その意義として「住民の異文化理解力の向上」を挙げている。具体的な施策として「多文化共生をテーマにした交流イベントの開催」が示されている。しかし、地域で実施される民族舞踊を見せたり、エスニックフードを食べたりする異文化理解と銘打った国際交流プログラムでは、概して楽しさという一時的な結果が重視され「その場限りの『国際交流』」(ハタノ 2006: 64)として「安易な『異文化理解』」(植田 2006: 52)に終わっているという指摘がある。

外国にルーツのある人々が日本人の家庭に滞在する「ホームステイ」もさまざまな形で実施されてきた。1933 年にアメリカ人のワットが行ったとされる「ホームステイ」では、当時ゲストの文化に合わせようとする日本人ホストにとって「アメリカからの学生を自宅に受け入れることは、想像を絶する大変な仕事」(山口 2008:51)であったという。本論では、ホームステイの受け入れに対して日本人ホストがどのような認識をもっているか PAC 分析を援用して明らかにする。

2. 本論の目的および意義

本論の目的は、日本人家庭の成員個々人が、ホームステイ受け入れについてどのような認識をもっているのか分析を試みることにより、異文化理解という名目で実施されてきたホームステイの内実を探ることである。そのために、各家庭で主にゲストの日常生活に対応するホストマザーを対象に、ホームステイの受け入れに対する認識を調査し、その経験がどのような影響を与えるのかについて PAC 分析を援用して明らかにする。

従来の研究では、日本人ホストファミリーの成員個々人の体験に関する詳細な点は注目されてこなかった。ホームステイは、異文化交流の機会としてさまざまな形で実施されてきたが、あたかも日本社会における異文化理解が進むと安易に語られる傾向があり、その内実については、検証が十分されていない。先行研究では、日本語教育の分野や意識調査など感想や満足度に関するものが多く、受け入れる日本人ホストを一律に受け入れ家庭として扱う傾向がみられる。しかし、日本人ホストは成員個々人で異なる認識をもっていることが予想される。

そこで本研究では、成員個々人の認識を詳細に調査するために、内藤(2002)による PAC 分析(個人別態度構造分析)を用いる。PAC 分析は『研究者の主観』を抑制し、『対象者の主

観』を探索するための操作的・客観的な水準を高める」(内藤 2011: 3)方法である。本研究により日本人ホストマザーの内面を PAC 分析することによって、ホームステイの内実の一端が明らかになる。

3. 先行研究

1932 年に高校生対象の組織をニューヨーク州で興した Donald Beates Watt(以下、ワット)が行ったエクスペリメントに端を発する「ホームステイ」は、日本では 1956 年に金沢市で初めて実施された(山口 2008)。山口(2008)は、当時ワット自身に本質主義的な他者規定がみられたと指摘する。ホームステイに関する研究では、日本語教育における有効性(鹿浦 2007)、ホストファミリーの経験に基づく意識調査(原田 2013)など参加者の感想や満足度に関するものが多く、ホームステイプログラムに内在している課題については「アカデミックな観点からの研究例は少ない」(奥西、田中 2008: 88)。また、ホームステイを受け入れる日本人ホストに関する研究では、世帯を構成する成員が一律に受け入れ家庭として扱われる傾向がみられる(奥西、田中 2008、鹿浦 2007 ほか)。「個人の行動の理解にあたって場におけるさまざまな要因を総括的に考慮に入れる」(我妻 2007: 114)態度が必要であり、受け入れ家庭の成員個々人の認識を調査するに至った。その方法として成員個々人の認識を詳細に調査する上で有効とされる、内藤(2002)の PAC 分析(個人別態度構造分析)を援用する。内藤(2018)によれば、PAC 分析は、「検査者が被検査者とともにイメージや意味を探っていく了解的解釈技法(現象学的データ解釈技法)」であり、その「解釈プロセスは、第三者にとっても被検者の潜在意識の構造や意味を理解するためのプロセスになり」、「研究者が気づいていなかった変数や要因の発見が可能」(内藤 2018: 1)となる。

4. 調査概要

4.1 調査協力者の概要

調査協力者はホームステイの受け入れ経験をもつ愛知県 T 市在住の日本人女性 4 名である(表 1)。

表 1. 調査協力者の詳細

	年齢	性別	受け入れ回数	受け入れ時の家族構成
A	57	女	1	姑・夫・本人・娘・息子
B	53	女	1	夫・本人・娘・息子
C	60	女	3	夫・本人・息子二人
D	54	女	5	夫・本人・娘・息子

以下は、調査協力者のホームステイ受け入れ経験である。

- A: 何度も話はあったが、姑に反対されてできなかった。しかし、1 回だけ強行してオーストラリアの男子学生二人を受け入れたことがある。
- B: 2013 年に初めてホームステイの受け入れを経験した。娘が交換留学でホームステイをする予定があったので、その前にアメリカの高校生を 40 日間受け入れた。
- C: 1984 年にアメリカの夫婦と娘の家族を 2 週間受け入れ、2006 年にニュージーランドの男

性を10日間受け入れたことがある。そのときは息子のラグビー留学の前に受け入れた。
D:Aさんのいとこで、以前はヒップファミリークラブ(筆者注:多言語で国際交流をしている団体)に入ったことがあり異文化交流の機会が多く、5回の受け入れ経験がある。

4.2 調査方法

調査は、2019年8月から2020年3月に協力者および研究者の居室で実施した。調査の所要時間は90分から120分で、適宜休憩を設けた。倫理的配慮として、調査協力者に研究目的および90～120分の調査中、中止・中断はいつでもできること、調査中の記録・調査後の結果の公表においてプライバシーを保護することなどを、説明しながら確認した。

調査の手続きとして、まず連想語記入シート(図1)の上欄の連想刺激文を調査者がゆっくり読み上げた後、協力者に連想語(文)、重要度順、イメージ(+、0、-)を記入してもらった。

あなたは「外国の人をホームステイとして自分の家で受け入れること」について、どのようなことを感じたり考えたりしますか。今までホームステイをしたことのある人や、自分の経験したことで印象に残っているのはどのようなことですか。頭に浮かんできたイメージや言葉を書いて下さい。			
	思い浮かんだこと	重要度順	イメージ

図1. 連想語記入シート(部分)筆者作成

類似度比較

右と左の言葉(文章)を比較して、類似度を判断してください。

- 似ている(関連が強い)場合に右→へ、
- 似ていない(関連がない)場合には左←へ、

スライダーを移動させて、適当と感じるところで止めてください。数字は目安ですので位置を直感的に判断してください。

「次へ」のボタンを押すと別の言葉の判断に移ります。

ちよつと準備がたいへんそう

主人がいやがるかな

似ていない
関連性がない

3 2 1 0 1 2 3 0

似ている
関連性が強い

戻る

次へ

残り比較数
3

図2. PAC-Assist2 内、類似度比較の入力画面(土田 2017)

次に、記入された内容を調査者が PAC-Assist2 に入力し、類似度比較の作業を協力者が行った(図 2)。類似度比較後、対称化された非類似度行列を CSV 形式で保存し、統計ソフト R でクラスター分析を行った。その後、作成されたデンドログラムに基づいて協力者の解釈を聞き取り、承諾を得て IC レコーダーに記録し、後日文字起こしをした。

5. 協力者 4 名のデンドログラムのクラスター分析および解釈

ここでは、協力者 A、B、C、D さんのデンドログラムのクラスター分析と各人による語りを示す。斜体は協力者の発話である。

5.1 A さんのデンドログラムのクラスター分析および A さん自身による語りと解釈

A さんのデンドログラムは図 3 となった。クラスター(以下、CL)1「受け入れ以前の問題点」の 5 項目はすべてマイナスのイメージであった。まず A さんは、寝具、掃除、食事の準備がたいへんそうだと述べている。セキュリティについては貴重品の管理のために、「入って欲しくないところには鍵をつけるとか」、「どんな人なのかがわからないということについての心配ってどうか不安だ」と語り「受け入れに関してのマイナス面」であると考えていた。また、同居する義母について、一回は「反対だったけど強行(苦笑い)」したと述べた。それまで受け入れができなかった理由について、核家族ではないことを挙げ、いとこ(筆者注:協力者 D さん)は、「結構いろんな国の子を何人も何回もホームステイさせてた」と話し、「すべての生活においてだけど、自分たちの思うようにはいかないことが多い」と語った。

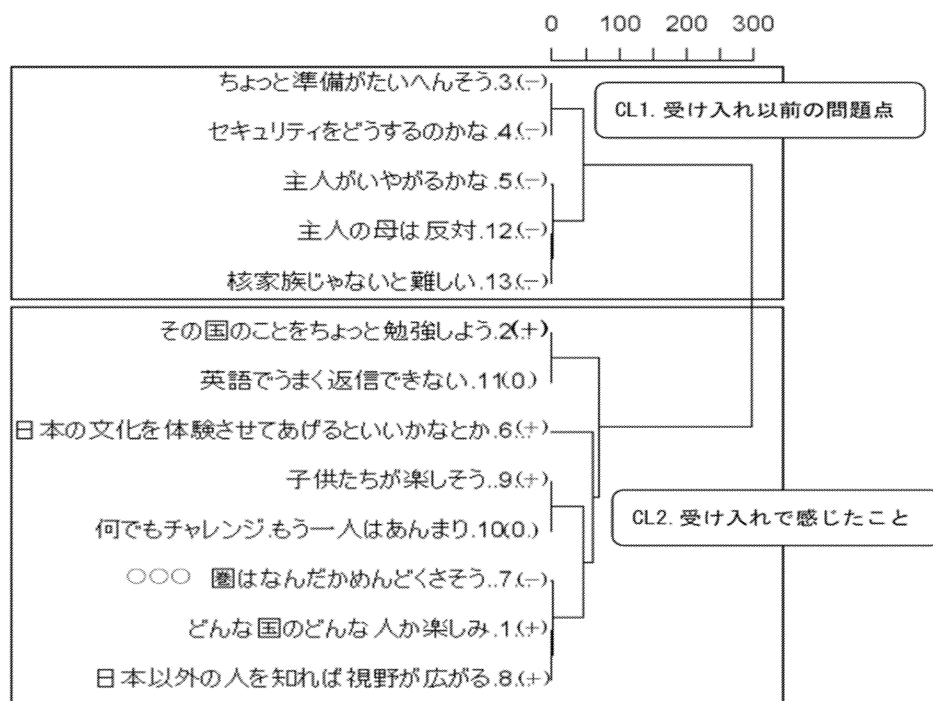


図 3. 協力者 A さんのデンドログラム

右の数値は重要度順、()内の符号は単独のイメージ(以下同様)

図中の〇〇〇は研究倫理に配慮して伏せ字とする。

CL2「受け入れで感じたこと」では、5 項目がプラスイメージ、「○○○圏はなんだかめんどくさそう」だけがマイナスイメージになった。重要度は、1 位が「どんな国のどんな人か楽しみ」、2 位が「その国のことをちょっと勉強しよう」であった。

各項目では、○○○圏や菜食主義者はなんだかめんどくさそうと話した。また、どんな国のどんな人か楽しみで、日本以外の人を知れば視野が広がるというイメージは、オーストラリアから二人のゲストを受け入れたときの体験が元になっていた。「一人の子は、その後何年も娘と交流」があり、「子どもたちにとっても私たちにとっても初めての経験だったけど、その後の人生においても大きな経験になったと思う」と述べた。

また、「受け入れに際しては、ある程度自分も勉強し、準備しておくことが必要」だと考え、CL1 と CL2 の関係は、「前向きなことと後ろ向きなこと」だと解釈した。「日本以外の人とコミュニケーションとったりすると視野は広がるし、いいことだなとは思ふ……世の中もつこう、いろんな国境の壁がなくなっていくような世の中になっていくだろうから若い人はどんどんいろんな国に、数泊でもいいからホームステイしたりするといいたいだろうなとは思ふ」と語った。

以上の結果から、A さんにとって受け入れ以前の問題が最大の障壁であり、人生のプラスになるというホームステイに対するイメージがあるものの、異文化理解に関する具体的な語りは「若い人は」というように限定的で、自分自身の理解を深化させるまでには至っていないことがわかる。

5.2 B さんのデンドログラムのクラスター分析および B さん自身による語りと解釈

B さんのデンドログラムは図 4 となった。CL1「あこがれの日本文化」の 4 項目はプラスのイメージで、「話さなくても日本語を理解していた」は重要度が 2 位だった。B さんは、ゲストに日本語を話すように促したが、ゲストは日本語を話すことや日常生活について知ることよりも着物や茶道、華道、旅行など日本文化を体験することに興味があった。B さんの家族は、全員が英語で意思疎通できるので、「英語が通じる家に来たことが彼女にとって良かったのか悩んだ」という。重要度の 2 位の日本語について、言葉ではわからないはずなのに、ゲストと B さんの夫が意思疎通できていたのが不思議で、「積み重ねた体験の中で覚えるんだ」と思ったと振り返った。「日本のよいところを見て欲しい」気持ちを「ハレとケ」のハレの部分と表現し、「日本のやっぱり文化とか、言葉とかを少しでも話せるようにしなきゃいけないっていう、ホストとしての使命感というか、気負いが……ありすぎた」と思いを吐露した。

CL2「お客様なのか子どもなのかの違い」は、「プライバシーの感覚のちがひ」と「部屋にひきこもる」の 2 項目だった。ここで B さんは、ゲストとの間に起こったトラブルについて語った。「あるときあまりに洗濯物が出てこないから部屋に行って落ちてた下着とかそういうものをわーっと拾って洗濯したんです」。このことをきっかけにゲストが「ものすごく落ち込んで部屋にとじこもる」ことになったという。「個室という感覚が(ゲスト)本人にはあって、私には子供部屋という感覚」があったと解釈した。

CL3「体験しなければ得られなかった感覚」では「英語しか話さない」だけがマイナスイメージだった。子どもが増えた疑似体験が重要度の 1 位で、娘がやきもちをやいたり、学校で校則を守らないゲストと娘の関係がぎくしゃくしたことを話し、「人が一人増えるだけで、化学反応じゃないんだけど、それまでこう見ずに済んだり起こらずに済んだことが起こりだすから、面白い」と語った。また、「プロフィール票をみると、すごくやる気のあるような感じでポジティブなことば

っかり書いてある……明るいアメリカの女の子を想定していたがそうではなかった」と語った。また、ゲストが英語しか話さず、最後まで日本語を話そうとしなかったことについて、日本語や日本の日常生活における習慣を教えることにこだわった B さんには「ジレンマがあった」と述べた。

帰国一日前に心が軽くなった理由は、ゲストが部屋にこもったときに家族への手紙も書いていたことを知ったからだという。「私は1ヶ月間言葉もしゃべれないところでサバイブした」とゲストから聞き、「だから彼女の中ではものすごい達成感だったみたい……私が思ってる留学と」違い、「彼女の中では留学というよりもサバイブした場(笑)」だったと聞いて「一つこう、大人になったっていうような顔をしたのがすごい印象的」だったと述べた。

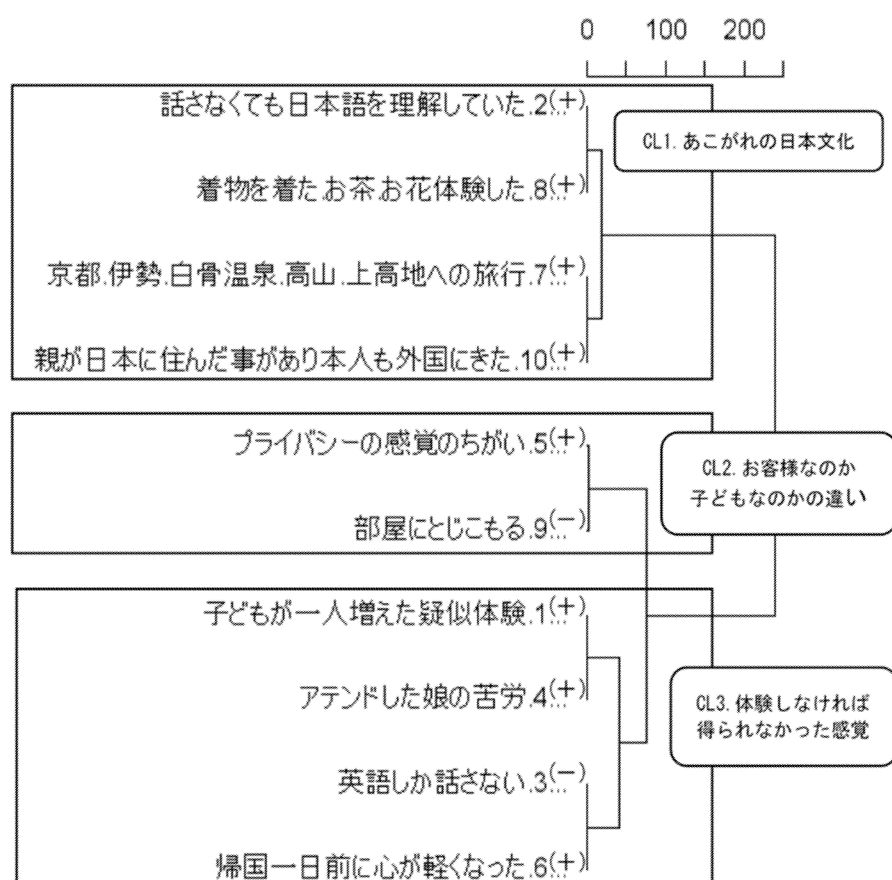


図 4. 協力者 B さんのデンドログラム

B さんは、「要求したつもりはないんだけど……自由じゃないと思ったかもしれない」と語り、自分の子育てを客観的に見る機会になったと述べた。「こういう日本留学もあるんだっていうのも私もわかったし……人の家でちゃんと自分が受け入れられて生活できたっていう成功体験ってそのあといいのかもしれないです」、「自分(筆者注: ゲスト)が成長したっていう、案外それが本質なのかなあ」と結んだ。

以上の結果から、B さんがゲストにホームステイで何を体験させたいか、ゲスト自身は何をしたいかという点で齟齬があったことがわかる。B さんのホームステイはこうあるべきという主観に影響されゲストとの関係が悪化したが、関係の改善を経てその認識が変容したことがわかる。

5.3 Cさんのデンドログラムのクラスター分析およびCさん自身による語りと解釈

Cさんのデンドログラムは図5となった。CL1「受け入れ態勢」は郷に入れば郷に従う、食事、習慣の3項目である。「こちらのスタイルで基本慣れてもらうのがいい」と第一に思うが、2回目のゲストが、「お味噌汁とかも全然飲まない……ご飯も食べない……とにかく日本スタイルはおろか、どういう食事をあげていいのかわからず」、「ほんとに困っちゃって、もうそういう風になってくると日本食を味わう以前の問題で(笑)」。帰りに飛行場に行く途中で「マクドナルドに行って、食べる事食べる事……せっかく日本に来たのに」と思ったという。

「別にあたしは絶対日本に来たから全部日本式でっていう風に言うつもりはないんだけど、なるべくでも日本の生活スタイルを知ってほしいっていうのもあるし、ただやっぱり、それこそ宗教とかの問題があると変わってくるので、そこらへんはやっぱり相手のことを尊重するのが必要だと思います」と述べた。また、朝シャワーを浴びることやクーラーを「がんがんかける」ことについて、「相手のそのスタイルをどこまで容認するか……相手のスタイルとこちらのスタイルをどのようにうまく擦り合わせるか」。「家は夜にお風呂だからねっていうことを、家のルールだからねって言うべきか、でも自由に入っていいよっていうのが良かったのか」悩んだという。

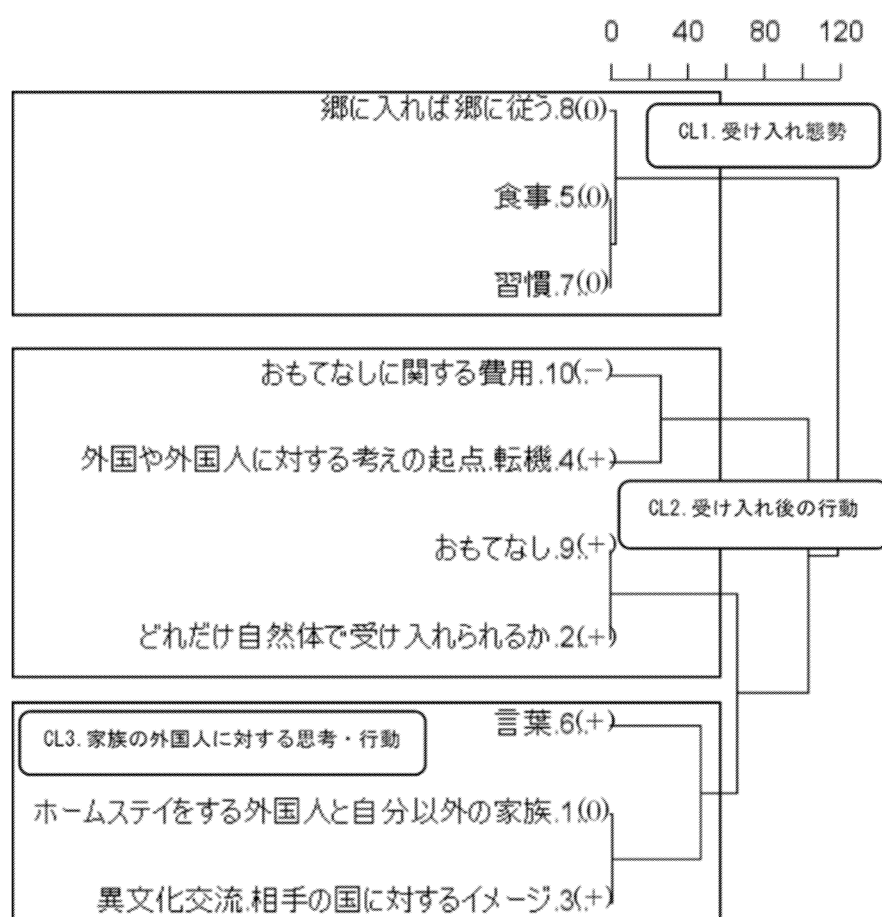


図5. 協力者Cさんのデンドログラム

CL2について、おもてなしに関する費用については、「どこまでこっちの費用を出すか」悩んだと語り、「ホームステイの子が来てなかったら行かないようなこととかやらないようなこと、わざ

わざ連れ出して行く……それをあんまりやりすぎるとこっちもいろんな意味で疲れちゃう」と述べた。「相手に合わせる事がすごく多かった」と振り返り、「どれだけ自然体に受け入れられるか」、「日本人ってやっぱりお客さん来たからもてなさなきゃみたいなのはすごく過剰にあるので、どれだけ自然にすることでホームステイを受け入れやすく」できるか、「気持ちが強すぎるとやっぱりやりたくなくなるし。すごく大変だし」と語った。

CL3 のホームステイをする外国人と自分以外の家族の項目は重要度が 1 位であった。「最初に受けるときは、やっぱり家族はどう思うんだろうっていうのは、すごいポイント高い」と述べた。言葉に関しては、「言葉がなくても心が通じるみたいによく言われるけど、なんか不思議でこういうのはあるんだなって」。「異常にお客さん扱いすることなく、極端に言っちゃったら家族の一員みたいな感じで、いかにそれに近い感じで他の家族とも一緒に食卓囲んだりとかなんか一緒に生活したりっていうところ」でまとまったと解釈した。「基本的には私自身ホームステイの受け入れをするっていうことに対しては、プラスのイメージがあって、機会があれば受け入れてみたいというのはある……一番柱で考えることは、どれだけ自然体で受け入れられるか、自分に無理なく。それがあればすごくホームステイのハードルが低くなるんじゃないかな」と結んだ。

以上の結果から、基本的にはホームステイの受け入れをすることに対してプラスのイメージがあり、機会があれば受け入れてみたいと考えているが、自分が無理をした経験から、どれだけ自然体で受け入れられるか、お互いのスタイルを尊重できるとよいと考えていた。ここでは、「過剰にもてなそうとする日本人」というステレオタイプが現実とつながり、C さんには課題であったことがわかる。

5.4 D さんのデンドログラムのクラスター分析および D さん自身による語りと解釈

D さんのデンドログラムは図 6 となった。CL1 の「準備で緊張もある」は、プラスイメージ、「今受け入れるとなるとちょっと躊躇する」はマイナスイメージであった。「他の全然家族じゃない人が家に来るってことは……ちゃんと受け入れできるかなあとか、不安とか」を緊張する理由に挙げた。また、今受け入れるとなると躊躇するという理由について、「子どもがいないと、結局一対一になっちゃうんで……そこまで深く関係性ができるかどうかわからない」と述べた。

CL2「実際に起きること」の項目は、重要度が高く「全然違う人が家の中入るってことで」、家族が変わったり関係がよくなることを 1 位に挙げている。2 位については、ほんとうに家族みたいになってくれることが「嬉しい、子どもが小さかったので遊んでくれたり」と述べ、「ただお客さんじゃなくって/家族として受け入れることが 3 位と続く。受け入れることによって「家族が変化する、気持ちが変わる。これが一番、ホームステイしていい、良かったなあと思えること」としてまとまとと解釈した。

CL3「表面的な目標」は、6 項目となりすべてプラスイメージであった。いろいろな準備をするのが楽しく、おもてなしとして「季節ごとにどっか連れてってあげたいとか、日本的なもの見せたり」と語った。また、最初は子どものため、「子どもにいろんな経験をさせたい、あと子どもがいると交わりも早くなるみたい」と述べている。友好がテーマについては「最初ホームステイ受けるのにそういうテーマみたいなの来るじゃないですか。他の国の人と仲良くしましょうみたいな感じで」と述べた。

それぞれの文化、世界の文化の違いについて、「いろんな話ができたりとか、言葉が通じなくても例えば中国の人だったら漢字でわかるし」、「異文化、いろんな文化の違いとかそういうの

を理解するってことかなあ、経験とか」、「最初にこうホームステイするときにこういう楽しさがあるよみたいな感じ」と解釈した。「最初はやっぱりこういうのが大事かなあと思うけど実際受け入れるとそんなに大変じゃないかな」と述べた。

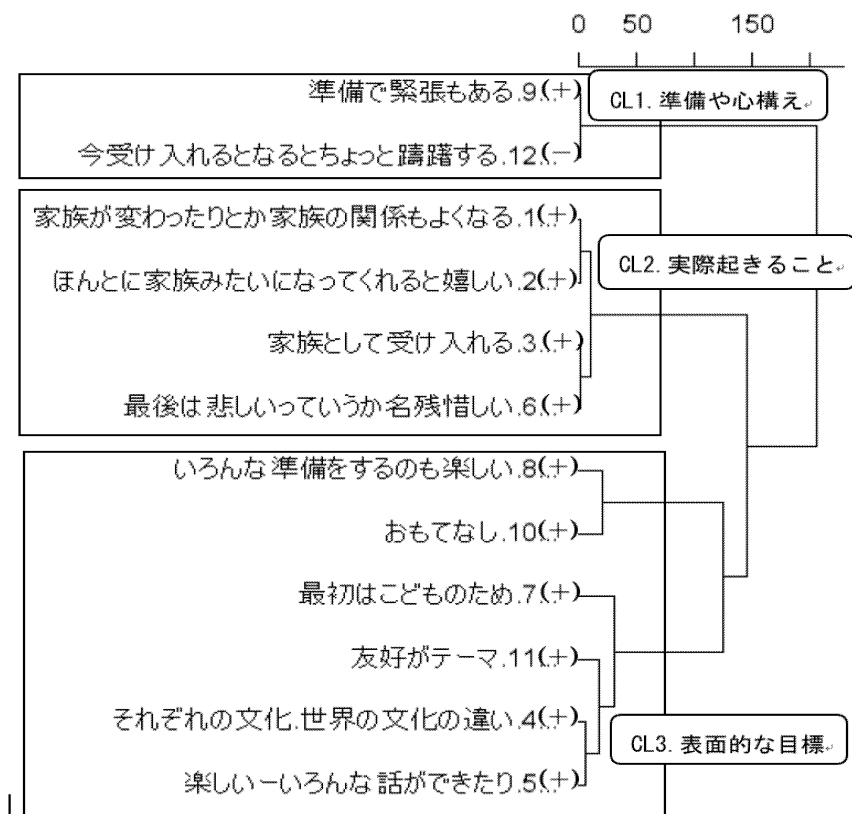


図 6. 協力者 D さんのデンドログラム

クラスター間の関係について、CL1 と CL2 は、「1 番は体験すること、表面的で、2 番は中身っていうか内容っていうか。1 番が大切だよと思うけど実はすごい 2 番でいいことがたくさんあるみたいな」。CL1 と CL3 は「準備とか心構えとか.....実際のこう表に出てる部分」と解釈した。「最初のきっかけは人に勧められてとか、子どものためとかだったけど、実際にやってみるとやっぱりすごいおっきな変化が起きるっていうか.....普段の家族の関係と、子どもにしても、夫にしても、違うところ、面が見れたりとか、なんか人を受け入れるっていうことで自分たちが変わるみたいな、そんな感じかな。受け入れも楽しいんだけど、(間)やっぱり最後残るのは自分たちの、その、新しい関係みたいな」と語った。

以上の結果から、ホームステイのテーマとして友好は表面的な目的であると感じ、ゲストとの交流を経験することによって起こる、自分たち家族の関係性の変化や新しい発見を期待しているということがわかった。また、子どもの存在が受け入れの意義を深化させると考えていた。

6. ホストマザー 4 名の「ホームステイ観」

以上の結果を踏まえて、4 名のホストマザーのホームステイに対する認識を「ホームステイ観」として考察する。

6.1 ゲストの立場に対する認識の違い

AさんとBさんは、受け入れる上で家族内におけるゲストの立場に対する考え方が異なっていた。Aさんは、準備段階のたいへんさにセキュリティや他人を家に住まわせることを挙げており、ゲストを家族の一員というよりも、お客として迎えるイメージが強い。対照的に、Bさんはゲストに自分の子と同じように接し親密な関係を作ろうとした。Dさんも、家族として受け入れようと考えているが、視点が自分の家族にある点が異なっている。また、ここで一見Bさんは受け入れを日常の延長と考えているように見えるが、日本文化のよいところを見せることに「ハレ」という言葉を使っており、ホームステイには「日常普段とは異なる心持ちで行う行為」(波平1989:164)としての非日常性があることを示唆している。Aさんのお客として迎えることにも非日常性があると考えられ、共通点がみえてくる。この点についてCさんの発言から、非日常性があるが故に、自分自身の日常を変え過ぎないで自然体で受け入れることが課題となったと考えられる。

6.2 他者理解に関する認識の違い

異文化理解に対する姿勢について、Aさんは、〇〇〇圏という特定の地域や菜食主義者というマイノリティに対するステレオタイプやゲストにあたりはずれがあるというようなイメージをもっていた。このことは、ワットにみられた本質主義的な他者規定に通底するものであり、「表面的には同質な社会に生きる多くの日本人」(グッドマン 2017 監訳者によるまえがき: 2) ホストに、異文化理解を促す上での課題がみえてくる。Bさんは、ゲストがプロフィールどおりの人物であること、アメリカ人の明るさをもっていることを想定し、ゲストに日本語を積極的に学ぶ姿勢を求め、ホストマザーとして実子のように接することができるという期待をもっていた。

Cさんは、「相手に合わせることがすごく多く、「無理」をしてしまった。つまり、ゲストとの対応でいかに擦り合わせるべきか悩んだということから、ホスト社会の日本人として自文化を無意識に強要する姿勢はBさんより少なかったといえる。社会的公正教育(グッドマン 2017)では、「日本人社会集団に属していることで労なくして得ることのできる優位性」(グッドマン 2017 監訳者によるまえがき: 3)を特権と定義しており、マジョリティであるホスト社会の成員はゲストの立場よりも上位となる可能性を秘めていることを、これらのホストマザーのホームステイ観から読み取ることができる。

6.3「ホームステイ観」の多義性

4人のホストマザーの「ホームステイ観」を比較すると、受け入れに際して比重を占めることに相違がみられた。Aさんは、ゲストをお客として迎え入れ、Dさんの言葉を借りれば「表面的な」異文化接触の機会と捉える「ホームステイ観」をもっていた。また、成員間の異文化に対する価値観の違いが受け入れの障害になり、家庭内における異文化理解の課題が存在することが示された。Bさんは、ホームステイのゲストに対するステレオタイプがあると同時に、ゲストに変化を求める姿勢があり、「ホームステイ観」がゲストとの関係悪化の要因となった。しかし、ゲストとの確執を経験したことにより、自分のイメージ通りの受け入れをするのではなく、ゲスト本人が成長することがホームステイの本質であるという「ホームステイ観」の変容につながった。Cさんは、いかに自分に無理なくどれだけ自然体で受け入れられるかが重要だというホームステイ観をもっており、この点が受け入れのハードルを下げると考えていた。Dさんは、家族以外の人

入ることによって自分の家族に変化が起こり新しい関係を構築できるという「ホームステイ観」をもっていた。

6.4 結論

本論では、日本人ホストマザーがホームステイの受け入れに対してどのような認識を持ち、その経験がどのような影響を与えるのか、ホームステイの内実を探ることを目的として個々人の認識について PAC 分析を行った。

本論の調査から、日本人ホストマザーのホームステイ受け入れに対する認識である「ホームステイ観」には多義性があることが明らかになった。具体的には、ゲストの立場に対する考え方や受け入れで重要視する点に相違があった。ホームステイを初めて受け入れる場合、自己変容に関する意識は低く、他者理解が促されるというよりも、自分がもっていたホームステイ観により、ゲスト側の変化に注目したり、期待したりするという認識がみられた。一方、受け入れを数回経験したホストには、状況により自分がいかに対応していくか、家族にどのような変化があるかというホスト側に関する認識がみられた。

また、これら個々人のホームステイ観に裏づけられた認識は、受け入れの準備段階から成員の認識や判断に影響しており、滞在中にゲストとの関係性を悪化させるというケースがみられた。これらのプロセスを経た受け入れの経験は、自分自身の認識を見直す機会となったり、ホームステイ観を変容させたりするという影響を与えていた。また、日本人ホストマザーたちは、日常の延長としてゲストを家庭内に迎え入れるのではなく、ホームステイの受け入れは「非日常性」をもつ場として認識しており、そこで視野が広がる、家族の関係性が変化するというような影響を期待していることが明らかになった。「文化」の多くは、日々の暮らしの細々とした行為を通して伝えられ、人々はそれを相互に確認し合って」(波平, 1999: 9)おり、そのような日常の場に導入される非日常性のある場としてホームステイは認識されており、その影響は異文化理解を促進するという一義的なものではなく、個々人の「ホームステイ観」の多義性によって左右されるものであると結論づける。

7. おわりに

一般にホームステイは、異文化交流の方法として一義的に捉えられる傾向があるが、日本人ホストマザーのホームステイ観には多義性があることが明らかになった。異文化理解という目的が前面に出されるホームステイに対して、日本人ホスト個々人のさまざまな認識を分析していくことで、ホスト社会の日本人の認識についても新たな知見を得られる可能性がある。今後、成員個々人の認識について PAC 分析を継続し、ホームステイを通じたホスト社会のあり方についてさらに考察していきたい。

【参考文献】

- 植田晃次, 2006, 『ことばの魔術』の落とし穴, 『「共生」の内実—批判的社会言語学からの問いかけ』第2章: 29-53, 東京: 三元社.
- 榎田勝利, 2004, 「国際交流・国際協力の新しい潮流と方向性を探る」, 『国際交流の組織運営とネットワーク』1章: 10-35, 東京: 明石書店.
- 奥西有理・田中共子, 2008, 「ホストの異文化接触に関する研究課題の展望—ゲストとの交流

- と関係性についての実証的研究」、『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』26: 76-88, 岡山大学大学院文化科学研究科.
- グッドマン, ダイアン J, 出口真紀子監訳, 2017, 『真のダイバーシティをめざして』, 東京: 上智大学出版.
- 鹿浦佳子, 2007, 「ホームステイにおける日本語学習の効用」, 『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』17: 61-112, 関西外国語大学留学生別科.
- 土田義郎, 2017, PAC-Assist2, (<http://www.kanazawa-it.ac.jp/~tsuchida/lecture/pac-assist.htm>, 2019 年 7 月 22 日閲覧).
- 内藤哲雄, 2002, 『PAC 分析実施法入門—「個」を科学する新技法への招待(改訂版)』, 京都: ナカニシヤ出版.
- 内藤哲雄, 2018, 「第 2 巻の発刊にあたって」, 『PAC 分析研究』第 2 巻: 1, PAC 分析学会,
(https://www.researchgate.net/publication/327764518_PACfenxiyanjiudi2juan2018, 2021 年 2 月 27 日閲覧).
- 内藤哲雄・井上孝代・いとうたけひこ・岸太一編, 2011, 『PAC 分析研究・実践集 2』, 京都: ナカニシヤ出版.
- 波平恵美子, 1989, 「「ハレ」と「ケ」—日本人における日常性と非日常性の演出」, 『日本音響学会誌』45-2: 163-166, 日本音響学会.
- 波平恵美子, 1999, 『暮らしの中の文化人類学・平成版』, 東京: 出窓社.
- ハタノ・リリアン・テルミ, 2006, 「在日ブラジル人を取り巻く『多文化共生』の諸問題」, 『「共生」の内実—批判的社会言語学からの問いかけ』第 3 章: 55-80, 東京: 三元社.
- 原田登美, 2011, 「日本で学ぶ留学生のためのホストファミリーによるソーシャル・サポート—ホスト意識調査の自由記述分析」, 『言語と文化』: 155-178, 甲南大学.
- 山口隆子, 2008, 「『ホームステイ』誕生の背景と求められた異文化理解—世界で最初のホームステイ組織・EIL を事例に」, 『神戸文化人類学研究』2: 30-69, 神戸大学紀要論文.
- レヴィン, クルト, 2017, 『社会的葛藤の解決』, 東京: ちとせプレス.
- 我妻洋, 2007, 『社会心理学入門(上)』, 東京: 講談社.